

跡見花蹊と木津得浅斎

武者小路千家家元 教授
ト深庵 木津 宗詮

願泉寺

木津家は三千家の一つである武者小路千家の茶家の一つである。木津家初代松斎宗詮は大阪の浄土真宗本願寺派願泉寺に生まれている。願泉寺は寺伝によると、小野妹子の八男多嘉磨義持（法名聖伝院永証）が、無量寿院という寺を建て、その別当職に任じられたことに始まる。その後、願泉寺は天台宗となり、二十七世浄教は本願寺八世の蓮如について浄土真宗に改宗した。石山合戦の折に本願寺十二世准如から本願寺の「願」の字を許され、寺号を「願泉寺」と改めた。なお、三十二世定龍は伊達政宗と親しく、政宗の書院と茶室を譲られ、後に国宝に指定されるが、惜しくも昭和二十年（一九四五）に空襲で焼失してしまい、庭園のみ旧態を残して現存している。

初代松斎宗詮

木津家初代松斎宗詮は安永六年（一七七七）願泉寺三十五世時龍の子として生まれた。弟に三十七代昇龍がいる。願泉寺の住職時代は降龍と名乗っていた。

松斎二十四歳の頃には、願泉寺三十八代住職となり、寺の法務を勤めつつ雅楽に励んでいた。その後、願泉寺の住持職を弟昇龍に譲り、まずは四天王寺の伶人として同寺に仕え、その後、雅楽を広めるために江戸に下る。江戸ではたちまち困窮し、当時、江戸随一の名声を得ていた八百善の板場として寄寓し、出雲松江藩主で茶の湯に格別造詣の深い松平不昧専属の料理人を担当したのである。不昧は、松斎を大崎下屋敷に招き、茶の湯や道具のことを学ぶ機会を作り、松斎はその研鑽に勉め、最高の修行をしている。そして不昧の推挙により武者小路千家八代一啜斎に入門する。

文化十年（一八三三）、松斎三十七歳で不昧から同筆「寒松一色別千年」の墨跡と木津の苗字、宗詮・ト深庵の号を与えられ、大阪において茶道の興隆に努めるようにすめられ、大坂の地に武

者小路千家の茶家を立ち上げた。その後は、天保二年（一八三三）、松斎は紀州徳川家に大坂在住の小納戸役として仕官し、徳川治宝に仕えながらも、大徳寺四百三十世大綱宗彦に参禅して「松斎」の号を与えられている。

松斎は大阪を基盤とし、兵庫（神戸市）・奈良・日野（滋賀県日野町）・水口（滋賀県甲賀市）等に武者小路千家の茶の湯伝播につとめている。その門人には、両替商・大名貸等を商う大坂を代表する有力豪商の一人千草屋平瀬春温、十人両替の米屋郡六右衛門、同じく鴻池と並ぶ十人両替の加島屋広岡久右衛門（現大同生命）、同じく加島屋長田作兵衛等の有力商人が多数いた。また兵庫には豪商北風六右衛門、北風荘右衛門等がいた。日野の門人では、家伝葉の製造販売する正野猪五郎・近江商人で最大の資産を築いた中井正治兵衛等、水口の門人では水口藩の大庄屋山村十郎右衛門、同じく大庄屋の池本忠右衛門等の近江商人の有力豪商、また水口藩加藤家の茶頭山本三慶等が、奈良では柳生藩筆頭家老小山田主幹、奈良の豪商嶋田平右衛門・高坂惣七等がいた。

松斎一代の大事業として、天保六年（一八三五）に武者小路千家九代好々斎が没し、表千家から養子として迎えられた以心斎が未だ八歳ということでその後見となり、同十年（一八四〇）に三千家を施主として営まれた利休居士三百五十回遠忌と追善茶事があり、多大な貢献をした。また、興福寺の一乗院門跡尊応入道親王に茶の湯を教授し、嘉永四年（一八五二）一乗院の茶室「忘葭」の作庭に携わるといふ栄誉にも浴している。

松斎は武者小路千家の茶の湯流布に東奔西走し、家元を支え、安政二年（一八五五）一月一日に七十八歳で没している。法名を歙深院降竜という。

二代得浅斎宗詮

木津家二代得浅斎宗詮は文政五年（一八二三）播磨国高砂の浄土真宗本願寺派善立寺十三代正嚴の子として生まれ、後に松斎の後継者として木津家に入家している。兄にのちに善立寺十四世となる正隆がいる。天保六年（一八三五）、得浅斎十四歳の時に武者小路千家九代好々斎に正式に入門。十代の前半には松斎のもとで武者小路千家の茶の湯を仕込まれた。そして大徳寺四百四十七世・玉林院十三世の拙叟宗益に参禅し、得浅斎の斎号を与えられている。

得浅斎は三十三歳のときに武者小路千家十一代一指斎の後見となり、松斎に引き続き、紀州徳川家に大阪在住として藩の特産品の専売を行う御仕入方として仕え、和歌山はじめ京都・江戸に赴い

て勤めを果たしていた。

得浅斎は夙に勤皇の志が厚く、勤皇の志士たちと深い交わりがあった。特にのちに外務卿になり不平等条約撤廃に功のあった睦奥宗光とその父伊達千広との交流は深かった。その一端が垣間見れる資料として、国会図書館の憲政資料室には、宗光が加島屋長田作兵衛に金子を融通してもらったり、得浅斎に周旋してもらうように千広が書いた紹介状が所蔵されている。

得浅斎は幕末維新を茶の湯者として、また勤皇家として活動する。ところが、明治になり茶の湯はかつてない衰退の時代を迎えることとなった。明治四年（一八七二）になると、得浅斎は、五十歳の時に和歌山県に帰農願を提出し、平民の籍となり、大阪梶木町の家屋敷を手放し、河内の若江（東大阪市）に居を移して農業に携わった。そうした困難な時代ではあったが得浅斎は河内で細々と茶の湯を教授し、明治十四年（一八八三）に一指斎が京都北野天満宮で初めて献茶を奉仕した際、一指斎と得浅斎、平瀬露香の三人が協議の上、新たに献茶点前を考案すると同時に、一指斎には真台子の返伝を行っている。また三代聿斎宗泉には武者小路千家の奥義を伝えている。

明治二十七年（一八九四）、若江を引き払い大阪の大国町に転居し、糸を商う店を開き、翌二十八年（一八九五）九月二十日、七十四歳で没している。法名を樹深院宗雲居士という。

得浅斎の門人として、後に武者小路千家家元預りとなり、大阪の財界の重鎮で名器を多数所持した平瀬露香、兵庫の豪商北風荘右衛門家の北風正道、岩国藩（山口県岩国市）の茶頭山縣玄巴、十人両替の加島屋長田政連、大阪の豪商山片重明、大阪の道具商戸田露吟・春海藤二郎、岩崎弥之助の依頼で三菱グループの深川親睦園（清澄庭園・東京都江東区清澄）の作庭をした磯矢宗庸等がいる。

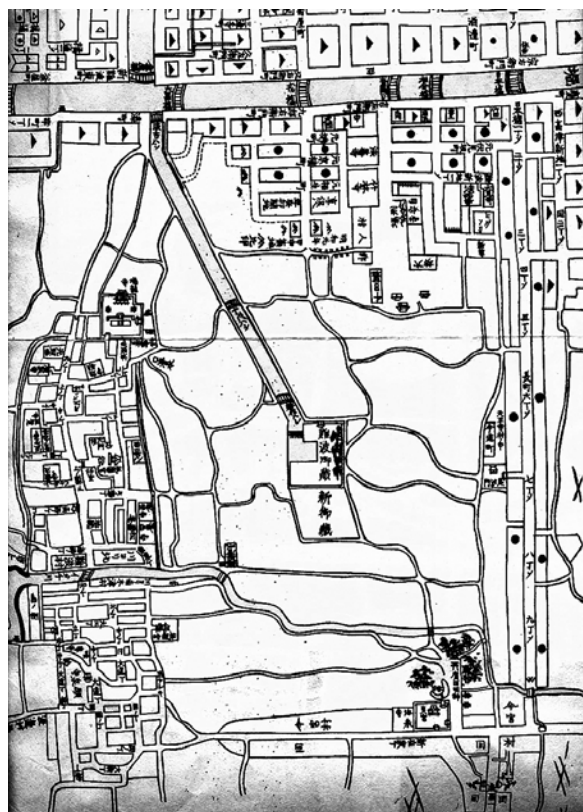
木津家と跡見家



跡見花蹊

（跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵）
この写真は「府下天下茶屋壺
天坂下 白水館 白井」とあり、
明治三年（1870）十一月に三
十一歳で東京に移住する以前
の写真と考えられる。

跡見花蹊の父重敬は松斎同様木津村出身である。跡見家の先祖が創建し、一族が代々住職を勤める跡見家の菩提寺である唯専寺（真宗大谷派）は松斎の実家である願泉寺とは通りを挟んだ向いに位置し、跡見家もその付近に屋敷を構えていた。重敬と松斎は旧知の仲



『増修改正摂州大坂地図』

（梶木町と木津村の部分・大阪教育大学付属図書館蔵）

幕末まで難波から南は農村地帯であった。右下にイタチ川を挟んで北が難波村、南が木津村である。木津村の中央西寄りに願泉寺があり、その北道を挟んで唯専寺がある。

で、茶の湯を松斎に師事していたようである。また、重敬は伊達千広に和歌を師事し、千広は松斎と紀州藩士としてのつながりから懇意な間柄であった。

『跡見花蹊日記』によると、重敬はしばしば梶木町の木津家を訪れていた記録が残されている。当時、重敬は姉小路家に仕官していて、中之島の跡見塾では娘の花蹊が近郷の子女に学問を教えていた。京都から大坂に下るたびという訳ではないが、頻繁に得浅斎のもとを訪ねていた。文久元年（一八六一）四月二十五日に、

四月二十五日

此日、勝蔵さま参られ候。八ツ時、木津さまより呼に來り、父様と同道にて木津さまへ参られ候。甚馳走頂戴サレ、一更に堺お吟さまと皆々帰られ候。

この日、花蹊の叔父跡見勝蔵は中之島の花蹊のもとを訪れていた。そこに得浅斎から呼ばれた父重敬が勝蔵を同道して梶木町の木津家に行き、食事の饗応を受けている。この時、重敬は京都の公



梶木町

(現大阪市中心区今橋四丁目)

中之島時代の花蹊は、この地の木津家に茶の湯の稽古に通っていた。



中之島

(現大阪市中心区中之島)

跡見塾はこの地にあった。

家姉小路公知の雑掌として仕えていて、大阪の花蹊の家
に滞在していた。

また手紙のやり取りもあつたようだ。「父さまよりの
文見せ、安心致され候」と、具体的にどのような内容か
は不明であるが、得浅斎になにか心配事があり、京都か
らの重敬の手紙により安心したとある。重敬も勤皇の志
士たちと交流があつたとされ、得浅斎と勤皇に関するや
り取りが行われていたようだ。そして重敬は松斎と得浅
斎の二代にわたり茶の湯を師事していたと考えられる。

重敬の姉小路家仕官のいきさつについて、花蹊の直弟
子藤井瑞枝が花蹊の語つたことを編集した『花の下みち』
に、松斎の弟昇龍の室貞道が、京の公家の澤宣嘉の娘で、
その貞道の口利きで、重敬は澤家の一族である姉小路家
に仕えたという記録がある。なお、貞道は宣嘉の養女と
考えられる。

姉小路家は澤家と同じく三条家の一族で、当時、当主
の公知は明治の元勳として著名な三条実美とともに、尊
皇攘夷の急先鋒であつた。のちに公知は禁裏の朔平門近
くの猿ヶ辻で暗殺されることになるが(「朔平門外の変」、
蹊も姉小路家を通じ三条家ははじめ澤家や石山家・萬里小路家・九条家等の公家に入入りし、その
子女の師となり、また多くの絵画制作をした。このことが東京移住後、跡見学園を支える人脈を築
くことになる。

このように、跡見花蹊と得浅斎が茶の湯の師弟関係になる前から、木津家と跡見家の交流は深かつ
たのである。

跡見花蹊の茶の湯

跡見花蹊が得浅斎にいつ入門したのかは不明であるが、『跡見花蹊日記』の文久元年(二八六)

六月一日の項に、

此八ツ時より木津さま御茶之湯に参り

とあるのが初出で、花蹊二十二歳の時である。その後、八月十四日には、

新三郎さま同道にて木津へ参り、竹の四方棚稽古見て帰り候。軸月下門宗守岸岱花白萩。

とあり、この日は、直斎好みの竹柱四方棚の稽古を見て帰っている。なお、床の掛物は好々斎が着
賛した岸岱の「月下門」の図であつた。月下門とは唐の詩人賈島が驢馬に乗つて詩を作つていううちに、
「僧は推す月下の門」という句を思いついた。その句の「推す」という語とは別に「敲く」という語
を思いつき、どちらが良いか手でその動作をしながら悩んでいた。そこに知京兆府事(長安の都知事)
韓愈の行列の中に突つ込んでしまった。すぐに賈島は捕えられて韓愈の前に引き出され、つぶさにそ
の経緯を申し立てた。名だたる名文家であつた韓愈は「それは「敲く」にした方がよからう」と言い、
二人はそこから意気投合して、馬を並べて詩について語り合つたという故事を描いた図であつたと思
われる。これが故事成語「推敲」のもとの話である。ちなみに岸岱は江戸時代後期の絵師で、岸
派の二代目で、禁裏の安政度造営の際に障壁画の制作に参加している。茶の湯は好々斎・以心斎の
門下として武者小路の千家の茶の湯を学んでいた。

『跡見花蹊日記』では、「竹の四方棚稽古」とか「小袋棚二手前(点前)稽古する」、「袋棚にて濃
茶稽古する」、「又炭手前する」等々一手前して、夜花月する」など稽古に関する記述が多数見るこ
とができる。時には「茶の稽古する、夜三更迄」と午後十二時まで稽古したり、また朝から終日稽
古をしたり、「茶の稽古新席で致し、又馳走に成、一更に帰り」とあるように、稽古のあと食事を振
る舞われることもあつたようだ。『跡見花蹊日記』には、文久元年(二八六)から文久三年まで、二
十歳から二十三歳までの三年間に、花蹊が得浅斎のもとでの茶の湯の稽古の記録をみることができ
る。ちなみに、文久元年八月十三日の記述に、

三之助、元之助、木津さまの長巻(長緒)之稽古に参られ候

とある。三之助は上の弟跡見重威、元之助は下の弟跡見愛四郎のことで、花蹊の二人の弟たちも同じく得浅斎のもとで武者小路千家の茶の湯を学んでいたことがわかる。

花蹊の画芸



跡見家の人々
(跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵)

前列向かって右から、跡見重敬(松齋門下・花蹊の父)・跡見重威(得浅斎門下・花蹊の弟)・跡見千代禪(花蹊の姉)。後列右から四人目萬里小路八重子(萬里小路道房の夫人、花蹊の養女跡見李子の実母)。

でしばしば得浅斎の依頼による揮毫をしている。

また文久二年(一八六二)七月十七日に

此朝、梶木町より呼に参られ候て、昼後より梶木津へ参り、応挙屏風(組秋草写し)に参り候

とあり、得浅斎は花蹊をわざわざ木津家に呼び、円山応挙の秋草の屏風を書写させている。ほかにも「鶴の香合写し」「雷の軸拝見致し候」など、得浅斎は花蹊の画業の足しになるように所蔵の作品を見せている。

そして、得浅斎は門人の田淵九八郎の揮毫や得浅斎の実家である高砂の善立寺の画帳や陣羽織の揮毫の仕事等を花蹊に周旋していた。また、これらの揮毫の具体的な相談を受け、指導もしていたことがわかる。

花蹊は教育者としてだけでなく、日本画家・書家としての側面も著名である。明治五年(一八七二)と二十六年(一八九三)に明治天皇の御前揮毫の荣誉を賜っている。中之島在住時

分の花蹊は、茶の湯だけでなく、得浅斎と画においても関わりが深かった。文久元年(一八六二)五月二十八日、漢学の師である後藤松陰の梶木町御霊筋西南角の塾の帰りがけに「木津さまへ寄、香合の菊認」とある。他にも「木津宗隆さまの木刀に黒漆にて画認」「木津さまの銘酒入認」「地袋落款致」「帛紗下絵して梶木町へ持参する」等の記述があり、木津家

跡見花蹊と得浅斎の交流

『跡見花蹊日記』には、茶の湯以外の花蹊と得浅斎との交流が多く認められている。文久元年(一八六二)の六月十五日の項に、

私、木津さまへ参り、お千枝さまの舞ノ地致し、暫遊んで帰り候。

お千枝とは明治十二年(一八七九)に亡くなった遊心と考えられる。この日、花蹊は木津家で舞の伴奏音楽である地唄の稽古をお千枝に付け、その後しばらく千枝と遊んで帰宅している。また、そして得浅斎のもう一人の娘でお蓮(智蓮)とも懇意で、「お蓮さまと三庭見物に歩く、今年はよほど淋しく候也」とあり、「三庭」は不明であるが多分庭園と思われ、二人で見物に行き、この年の風情が例年に比べ寂しかったと記している。他にも、「お千枝さまと同道にて細矢へ参り、お茶呼れ」とあり、お千枝とともに得浅斎の門人細矢宗祝を訪れ茶を飲んでい。そして、花蹊は漢字の後藤塾の帰りに木津家を訪れ、「本、木津さまへ預け」て遊びにいったり、「七ツ時迄遊ぶ」とか「木津宗詮へ行、有所遊にて馳走、日暮て帰り候」と日記にはしばしば木津家で遊ぶとの記述があり、日頃絵の染筆や、塾での講義、また自身も後藤松陰のもとで漢学を学ぶ花蹊にとっては、木津の娘たちと遊ぶことで気晴らしをしていたと考えられる。そしてある時は、「色々京師の面白き咄し致し、コテコテして終日暮す」とあり、得浅斎が京都の面白い土産話を花蹊にし、終日、濃厚な会話をしている。ちなみに「コテコテ」とは程度が甚だしいとか、「嫌という程」とか「濃い」とかの意味の「こつてりした」という形容詞からきていて、「こつてりこつてり」が詰まった好意的なニュアンスの上方の言葉である。花蹊は茶の稽古や絵の話だけでなく、得浅斎と世間話などとして楽しんでいた。

そして得浅斎の娘お蓮の嫁入りの記述がある。お蓮は、表千家の吸江斎の後見を勤めた二代住山楊甫の息江甫の室となり。明治五年(一八七二)五月十四日に亡くなっている。

八月八日

此日七ツ前、木津より呼に来、早々参り候処、此夜、嫁入荷物行候ゆへ、只今雛さま出来成、雛の認、杉戸認る。此時広岡隠居居られ候。夫より細矢宗祝子手前にて御茶呼れる。此時、客、大仙子、広岡、同米女、森はる子、細矢後室、堀宗三、私也。夫より御酒大さき(騒ぎ)二

更に仲人勘助子帰られ候。私、夫より帰宅。

「七ツ時」すなわち午後四時前に、木津家に呼ばれ、早々に赴いたところ、この夜お蓮の嫁入荷物が住山家に運ばれるので、嫁入荷物の内の描き上がったばかりの雛の絵を木津家に持参し、杉戸の絵も認めた。その場には木津の社中の加島屋の隠居広岡と米夫妻と木津家の代禰古の堀宗三、大仙なる人物と森はる子、そして仲人の勘助が同席していた。細矢宗祝の点前の茶の後、一同祝酒を大騒ぎで飲んでいる。

翌日には、

八月九日

日暮より木津に行。此夜、蓮女嫁入にて、暫居り、嫁入済て帰り候。

この日も日暮れから木津家に赴き、この夜お蓮の嫁入りに立ち会い、嫁入り終了後に帰宅している。今日迄、蓮が住山に嫁いだこと以外は何一つ伝わっていなかったが、花蹊の日記には婚礼の日にもや嫁酌人の名前が記されていて、木津家にとっては誠に貴重な記録である。

花蹊と得浅斎の關係が誠に懇意だったことがわかる記述としては、「木津さまへ参り、風呂戴」とか「風呂入に木津さまへまいり」とあり、木津でしばしば湯をしていた。今日のように風呂が大半の家に普及している環境からは想像できないことであるが、昔は風呂のない家が多く、ごく親しい家の風呂に入らせてもらう家が多かった。

又木津さまへ三之助同道にて参り、又御酒にて、三更迄。下男、木津さまにて一宿

三之助（跡見重威）を同道して木津に赴き、深夜三更（午前零時から二時間・子の刻・丙夜）まで酒を饗され、下男を木津に一宿させてもらっている。他にも「御酒吸」などと記されていて、しばしば酒飯を木津でよばれている。

そして、文久二年（一九六二）の七月八日には、前日より腹痛に苦しんでいた花蹊は、木津の得浅斎の息子孝助に木津村の母を呼びにってもらっている。そして七月十日には、

此朝、又気分あ（悪）しく、独いたしかたなく、孝助殿、木津よりの返事もなく、母事病氣いか、（如何）に候哉、それも聞たく、昼前、木津宗へ参り候へは、母も病氣あしくよして、暫木津宗にて寝たり起きたりいたし、昼飯（粥）呼れ云々

体調を崩した花蹊が、孝助に木津村の母幾野を呼びにってもらったところ、幾野も病気で中之島の跡見家に出てくることができない状態であった。木津家からは幾野の病状の報せもないので、具合の悪い花蹊自ら木津家に幾野の病状を訪ねに赴いた。そうしたところ幾野の病状も芳しくなく、花蹊の体調も悪かったのだ、そのまま木津家で寝たり起きたりし、昼食に粥をよばれた旨が記されている。また、この日と翌日は、一人暮らしの花蹊を氣遣つてお千枝が花蹊の家に二日間泊まっている。他にもお千枝は花蹊宅に泊まることかしばしばあったようだ。孝助も花蹊の用事をつとめることがあったようである。ちなみに、文久二年（一八六二）の七月二十六日に、「梶木町より孝助死去しらせに参る」とあるように孝助はこの日に亡くなり、重敬が木津家に弔問に赴いている。

文久二年（一八六二）八月五日に、

梶木町十七吉子の六日さりにて、父さま行れ、一更二帰られ候

八月一日に三代聿斎宗泉（宗詮）が誕生。この記述の十七吉は三代宗泉の幼名である。「六日さり（だれ）」とは、昔は出産は穢れの二つとされ、産後三日目に産婆または身内の女性が産室で木の鹽の湯に塩を入れて身体を拭い、六日目には身体を洗い、そして赤ん坊の産毛を剃り、名付けを行った。これを「六日さり（だれ）」といい、親戚や近所・知人はこの日をめぐに祝儀の品を持参して祝いを行った。この日は重敬が十七吉出生の祝いに木津家を訪れ、祝いの膳を食べて一更（午後七時から八時までの間）に帰宅している。なお、十七吉という名前のいわれは、得浅斎の十七番目の子という意味で命名された。

文久二年（一八六二）十月二十四日、花蹊はお蓮やお千枝と細谷宗祝の茶事に招かれている。

十月二十四日

朝、辻さまより帰り、子達をし（教）へて、辻さまにて身こしらえて梶木町へ行、お蓮さま、御千枝さま、私、細谷へ行、正午茶之湯、私上客、詰お蓮さま。

掛物 乾不画小字二行割、以下同、チウコウ宗匠、鷺峰山頭松月先拙書

釜 淨玄作三合尻はり

香合 染付

水差 備前

茶碗 黒楽、銘恵ヒス

茶入 アコタ書付

薄茶碗 仁清

茶杓 銘嚶嚶 袋フツウ

花入 丹作 尺八 銘 書付有

花 桂 水仙

茶 綾ノ森詰

会席

向「赤楽 菊皿 大左衛門作、若狭もとぎ小鯛」

汁「百合根 カウ竹 からし」

煮物「アンヘかぶら、金子玉子、ゆう」

吸物「チャロキ、路のとう」

八寸「海老金南」

かうの物「ナスヒ」

後、薄茶手前、千枝さま遊し候。誠にもしろき事也。

この日の朝、花蹊は中之島の跡見塾で子供たちに講義をし、辻家で身こしらえをして梶木町の木津家に赴き、お千枝とお蓮同道で、細谷家に赴き、正午の茶事に参席した。花蹊が正客でお千枝が次客、お蓮が末客。濃茶のあとには、お千枝が薄茶点前をしている。花蹊はこのことがよほど面白かったようである。他にも木津の二人の娘たちと稽古をしたり、花月をしたりしている。花蹊が大坂で活動していた幕末期には、多くの富裕町人たちの子女も茶の湯を嗜んでいたようで、女性のみで茶事に招かれているこの記録はまことに興味深いものがある。また、彼女たちにとつての茶の湯は、のちに花蹊が東京の跡見女学校で女性のたしなみとして「点茶」という科目を設け、女性の行儀作法のために茶の湯を学ぶというのではなく、女性の娯楽が制限されていた時代の楽しみの一つであったこと

がわかる。

そして、得浅斎とも直接行動を共にしている記録が残されている。その一つが文久二年（一八六二）のもの。

八月二十八日

此日七ツ時前に、木津宗匠、願泉寺に仏参致され、又跡見さまへよられ候て、暫御咄し有て、私事、宗匠と同道にて梶木町迄帰り候。

この日は七ツ時（午後四時）前に、得浅斎が願泉寺に参拝し、跡見さま（唯専寺）に立寄り院主と話しをし、花蹊は得浅斎とともに梶木町の木津家まで一緒に帰っている。多分この夜は木津家に泊まったものと思われる。

また、文久三年（一八六三）、徳川家茂が上洛した時に孝明天皇が攘夷の勅命を下し、攘夷祈願のために下・上賀茂神社に行幸した。その時、花蹊は得浅斎やお千枝やお蓮らと見物のために上洛している。

三月五日

此朝、宗隆さま京師より帰られ候て、私呼に來、早々行処候、父さま申され候、此十一日上様將軍様御供にて加茂へ御参りあらせられ候ゆへ、右様な事は稀なる事、中々なき事ゆへ、拝見に上京する様申居られ候。

この朝、得浅斎が京都から戻り、花蹊を呼び、京都の父重敬話を伝えた。それはこの十一日に孝明天皇が將軍徳川家茂を供として下・上賀茂神社に参詣する。このようなことは滅多に無いことなので、ぜひとも上洛して拝見するようにとの内容であった。

三月八日

此日朝、梶木町へ行宗隆さまと同道にて上京の相談致し、薄茶一服呼れ、此時、堺吉井、赤松居られ候。夫より辻さまへ行、をし（教）へ致し居り候処、元之助呼に來、早々帰り候処、木津智明院さま、美つへさま來られ候て、早々こしらへ（拵）して、隣家お雪さま、私、元之助、智明

院さま、美つへさま、因州より来り候十助つれへ歩して中城迄行、此出立昼時、中城へ日暮着、此夜田尻氏にて二宿。

この日の朝、梶木町の得浅斎のもとを訪れ、得浅斎と上京の相談をし、薄茶を二服よばれた。その場には前日から大坂に出てきていた堺の跡見の親族吉井と千草屋平瀬家の別家の赤松道堅あかまつちうけんが同席していた。それから辻家に教えにいき、下の弟の元之助（跡見愛四郎）が呼びにきたので、早々に帰宅したところ、木津村の智明院ちみょういんと美つへなる人物が来ていて、早速に旅支度をして隣家の豊島、元之助、前出の智明院、美つへ、因州から来ていた十助同道の上、昼頃大坂を出立し、日暮れに中城（茨木市中ノ条）に到着し、田尻氏の家に二宿した。

三月十二日

此朝、宗隆さま、吉井、同おきんさま、順蔵、吉助、細矢貞順さま、お千枝さま、御蓮さま、広甚、直太郎、つる、孝助、皆々来、私同道して下加茂御跡拜見に行。云々。

十二日には得浅斎たちと下鴨神社に行幸の跡を見物に行っている。得浅斎はこの前代未聞の出来事を見るために三人の子供たちを伴つての上洛であつた。

そして花蹊は得浅斎や田淵たふちらと頼母子講たのもしこうをしていた。頼母子講とは、講員が掛金を定期的に出し合い、入札または抽選で毎回その中の一人が交代で所定の金額を受け取る組織である。

梶木町へ参候処、講金、閏月、九月、十月、三月分、田淵さま、松田さま、安土さま、安土さま取次、四口参り候処、式分天民へ相代として宗隆さま相渡され、金壹両請取

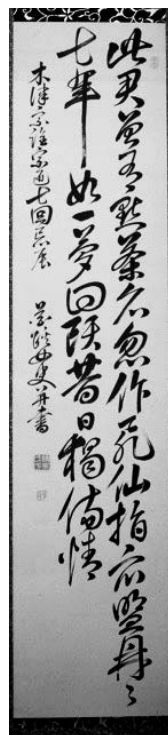
以上のように、『跡見花蹊日記』から、花蹊は得浅斎に茶の湯を師事するだけではなく、その娘たちと姉妹のように親しくまじわり、木津家と家族同様の交際をしていたことがわかる。若い娘の花蹊がけなげに一人暮らして中之島の塾で教授・運営している様子を見て、得浅斎は娘のように慈しみそしてかわいがり、跡見家と木津家は家族的な付き合ひをしていたことがわかる。

東京に移住後の『跡見花蹊日記』には得浅斎について全く記述されることがない。ただ当家には得浅斎の七回忌に花蹊から贈られた掛軸が伝わっている。

此君曾有点茶名、忽作飛仙指亦盟、冉々

七年如一夢、回既昔日独伝情

木津宗詮宗匠七回忌辰 花蹊女史並書



得浅斎七回忌に当り、ありし日の得浅斎を偲び揮毫され、その霊前に捧げられた。

得浅斎の七回忌は明治三十三年（一九〇〇）で、その法要を事斎宗泉が施主として営んでいる。花蹊は若き日に得浅斎に茶の湯を師事し、その娘たちとも深く交わり、木津家とは格別昵懇の仲であつた。この詩にはその思いが込められている。